

「日本人は嫌いだったんだ。」

(財) 交流協会台北事務所 総務部長 岡田健一

最近、私が台北市内でタクシーを拾った時のことでした。タクシーに乗った後、「最近、景気はどうか」、「タクシーに乗るお客さんは多いですか」といった、ごくありふれた会話を交わした後、突然、老年の運転手さんが、ぼつりと、つぶやくように言ったのです。「お客さん、日本人だったよね。私はもともとね、日本人は嫌いだったんだ。」

台北に私が赴任してきて約3か月余り、ついに初めて、正面からそういう人に出会いました。思わず固唾をのむ私に対して、「自分は、両親が大陸から来た抗日戦争の体験者だったので、自分も日本人はずっと嫌いだったわけさ」。一見、学者にも見えるくらい紳士然としたその老年の運転手さんは、別に怒りをあらわにするでもなく、淡々と続けます。この後、いったい何が飛び出すのか。更に何かを話したそうな運転手さんの気配を感じ、私は運転手さんの次の言葉を待ちました。

「ところが、今は、やっぱり日本人ってのは大したもんだと思ってるのさ。正直言って、尊敬するようになったよ」。思いもかけない展開に驚くばかりの私をよそに、運転手さんは、一呼吸置き、何かをしみじみと思い出すかのように言いました。「今回の東日本大震災の際の被災地の日本人たち。彼らの忍耐強く且つ節度ある行動ぶりを見て、自分は感動したんだ。本当に日本は一流国だって、よく分かったよ。」

台湾のいかに大勢の人々が日本に対して温かい気持ちを持っておられるとしても、一部には日本に対して厳しい見方をする人がいるということは、もちろん頭では分かっているつもりでした。また、別の日に乗った別のタクシーの運転手さんが私に対して、「お客さん、日本人なのかい。だったら、台北も悪くないけど、台中や台南に行った

ら、人々はもっと日本人に友好的だよ。さらに花蓮や台東にまで行ったら、もっともっと友好的だよ。」と言い、日本人に対して必ずしも友好的でない人が台湾にも一定数存在することを前提にした話をしてくれたこともありました。

しかし、半世紀以上も前に終わった抗日戦争に端を発する反日感情が、これだけ日本に温かい気持ちを持っておられる人々の多い台湾においてすら、一人の人間の心の中で今に至るまで生きていたことを実体験したことは、台湾の多くの方の本当に優しい気持ちに3か月間慣れ親しんでいた私にとって、台湾社会の複雑な一面を目撃したという意味で、非常に記憶に残る事件でした。

しかし、それ以上に、東日本大震災の際の被災地の人々の行動ぶりが、半世紀以上も一人の人間の心の中に燻っていた反日感情を見事に打ち砕いてしまったことは、私の胸を強く打ち、改めて被災地の人々に対して頭を垂れる思いでした。東日本大震災は、日本に常日頃から強い関心を持つ多くの台湾の人々の中に様々な感情を生じさせ、多くの場合、それは真の友人としての心からの同情であったわけですが、日本の友人でなかった人間の対日観まで変わったことを知り、究極の逆境において被災地の方々が示された忍耐や節度が発揮した力の偉大さに対して、私自身、強い敬意と熱い感動を感じたのです。

そして、改めて日本人としての誇りを感じるとともに、それらの偉大な力が実現した台湾におけるさまざまな変化を生かし、台湾と日本の関係を更に前進させる上で、自分自身も力を尽くしていこうという決意を新たにしました次第です。今後とも、皆様の御指導御鞭撻をぜひ宜しくお願い申し上げます。